

変わる/変わらない子どもの本

—人気シリーズ「ゾロリ」「ルルとララ」の再検討—

藤本 恵

1. 児童文学を読む理由

子ども向け読みものの世界に、エンターテインメント系の幼年童話が登場したのは1980年代です。それらが大人の児童文学者から批判されがちだった状況を紹介し、あわせて、私たちがなぜ子どもに<文学>を読ませようとしてきたのか、その理由を考えてみます。

- (1) エンターテインメント幼年童話の登場
- (2) 大人の批判と子どもの支持
- (3) なぜ<文学>なのか

2. <文学>への挑戦者「ゾロリ」

「ゾロリ」シリーズ（原ゆたか、ポプラ社）は、本を、映像作品やゲームと並ぶエンターテインメントにしようとしてつくられたのだそうです。そのために何が持ちこまれたのか、子どもたちの心をつかんだ<文学>性について考えます。

- (1) 「ゾロリ」のはじまり
- (2) 物語パターンの利用
- (3) ことば遊びとパロディ

3. <文学>の継承者「ルルとララ」

「ルルとララ」シリーズ（あんびるやすこ、岩崎書店）は、寺村輝夫「こまったさん」「わかったさん」シリーズや、子ども向け料理番組などに連なる読みものです。それらと比較しながら、「ルルとララ」に見られる<文学>性について考えます。

- (1) 「ルルとララ」のはじまり
- (2) 物語パターンの利用
- (3) 比喩と情景描写